

菊地俊朗さん

世界には知っておきたい人、知っておくべき人がたくさんいる。「時代を創り上げた 100 人」とか「日本を経済大国に仕立て上げた 80 人」といった、人にスポットライトを当てた話はたくさんある。『文藝春秋』の今月号は、「美しき日本人 50」を特集している。登山の世界でも然り、忘れてならない先輩は大勢いる。そのお一人、菊地さんは信濃毎日新聞社で常務・松本本社代表を務めたジャーナリストだ。ぼくら山好きは、同新聞を親しみと敬意をもって新毎と呼び、新毎の登山報道は見逃さないよう目をこらしていたものだ。菊地さんは 64 年ヒマラヤ遠征報道で日本新聞協会賞受賞、退職された現在、山岳ジャーナリストとして活動されている。

主な著書に『栄光への挑戦』（二見書房）『山の社会学』『北アルプスこの百年』（文藝春秋）ほか多数ある。14 年 8 月、信濃毎日新聞社から『ウェストンが来る前から、山はそこにあった』を刊行、ご恵送頂いた。いずれの著書も興味深いが、ここでは『ウェストンが来る前から、山はそこにあった』を紹介したい。

日本アルプスといえば、命名者はウェストンだと思っていた人が多い、と菊地さんは指摘する。今でも頻繁に使われる「近代登山」という用語にも違和感を拭いきれない。「日本アルプス」の命名者はウィリアム・ガウランド、1872（明治 5）年、大阪造幣局にまねかれた英国出身のお雇い外国人だった。冶金技師、考古学者として知られ、造幣技術の指導はもちろん、「日本考古学の父」ともいわれる。登山は趣味、実際ガウランドは日本の山々によく登っていると、『・・・山はそこにあった』で紹介されている。

登山は趣味と割り切っていたのか、ガウランドの山行記録は少ない。そのことが「山」の虚像が演出される下地になったのかもしれない。イギリスの女性山岳研究者ヴァレリー・R・ハミルトン女史は、「日本山岳会設立前史—ガウランド・志賀重昂・ウェストン・小島烏水—」の調査に来日した。イギリスではさほど評価を得ていないと思われるウェストンが、日本では“近代登山の父”としてあがめられ、ウェストン以前に日本の山々を踏破していた同国人のガウランドやチェンバレン、アーネスト・サトウらに勝る評価をうけている背景の探求だった。

ハミルトン女史は、「日本山岳会設立の立役者小島烏水も、志賀重昂と同じように西洋人の書きものを自分の目的のために利用した」とする。ウェストンが“近代登山の父”とは、烏水の宣伝力の賜だろう。菊地さんは、烏水と新田次郎を『山』の虚像を演出した 2 人と指摘。詳しくは同著を拝読頂きたい。

うまく書けなかったが、『ウェストンが来る前から、山はそこにあった』は、スポーツクライミングがオリンピックの種目に選ばれた今、ぜひ読んで欲しい一冊である。